

# 自然体験活動と社会教育実習 － 21 世紀の城からみる若者の力－

水野 貴宏\*

## I はじめに

豊田市青少年センターは、4年前より大学との連携事業に取り組み、社会教育の職場を体験する機会を学生に提供している。ここで紹介するのは、愛知教育大学の「社会教育実習Ⅰ」が、豊



田市主催の自然体験活動のイベントを通して、2018年11月に行われた事例である。また、この事業の開催地「炮烙山（ほうろくさん：標高684 m）」の頂上には、青少年センターが中心となって建設した「21世紀の城」展望台がある。こうした経緯があり、この事業と同時に実習の実施を図ることとした。

まず実習の前に、大学にてガイダンスを行った。受講する学生の26名中23名がキャンプは未経験ということがわかった。彼らは、友人・

知人や家族と野外活動やテント生活など殆どしたことがないのだ。このことは、50年以上豊田市の里山・小川・田んぼや畑の中で暮らしてきた私にとっては、大きな驚きであった。この実習は、彼らにとって未知の経験である。また、青少年センターでインターンシップ事業を実施する中で、学生のレポートに「コミュニケーションをとるのが苦手」と書かれていたことを思い出す。これは、自分の力でしなくても周りがやってくれることが多く、物資の豊かさや利便性に恵まれた中で育っている弊害なのか。あるいは、スマホやネットなど、急速に発達する通信技術の中、摂取できる情報量が多大であり、その選択・決断が困難であるからか。学校や学習環境において、皆より秀でることでバッシングを受けるからか。また、失敗することを常に恐れているからか。いずれにせよ、彼らの置かれたコミュニケーションが難しい環境や、そこから脱することができない「もどかしさ」を理解することが大切である。そうした彼らにとっては、体験活動自体が必要で、実感からくる学習が自分の心に残る経験となるよう配慮していく必要がある。それには、自然体験活動をする中で、コミュニケーションの機会を増やし、その能力を高める機会が大切であると考えた。

今回の自然体験活動のイベントは、「市民いきいきウォーキング in ほうろく」と題した事業であり、「21世紀の城」展望台並びに炮烙山を市民へ広め、活用してもらうために行われた。麓から頂上までの道のりは4km、標高差は280 mあり、参加者はその行程を自然に親しみながら自由に歩くのである。八合目のいこいの広場では、活動の支援・サービスを受けることができる。この取組には、青少年センター登録の青少年団体であるボーイスカウト、ガールスカウト、学生グループ「とよた学生盛りあげ隊」が中心となり、愛知教育大学の学生は、参画するスタッフとして活動した。

---

\* 豊田市青少年センター所長 愛知教育大学非常勤講師

実習は、1泊2日の宿泊研修を2回実施した。自らが野外活動を体験し、支援する企画を立案・確認・準備する宿泊研修、そして参加者を迎え、そのウォーキングを支援するための宿泊研修である。この実習は、学生が自然や人と触れ合い楽しみ体験学習するだけでなく、自然体験活動において参加者を支援する視点をつくることを目的とした。また、イベントの趣旨にも目を向け、この地で行われた豊田市の青少年教育の歴史を学習することも加えた。それは、今から33年前の1985（昭和60）年国際青年年に実施された青少年健全育成事業「21世紀の城」展望台建設における、豊田市の若者の歴史である。同年11月に建てられたこの展望台は、市の花「ひまわり」を形どり、その周りには市民から持ち寄られた石の城壁が連なっている。石に刻まれた当時の若者の願い3万2千個を直接見ることができる。

このように、豊田市の青少年教育の歴史と社会教育実習Ⅰをつなぎ、実習の良さ・効果、自然体験活動の意義を学生の学びの中から捉えながら、「社会を生き抜く力」を考察する。

## Ⅱ この地の特性を知る

最初に、学生が参画したイベントの開催地と青少年教育施設の歴史について触れておく。

豊田市は、2018（平成30）年4月1日現在、人口は42万4500人（豊田市HPより）であるが、1951（昭和26）年に挙母市として誕生した頃は、わずか人口3万2千人だった。1955（昭和30）年代に高度成長期を迎え、地方からの若年労働者の都市部への流入が始まった。高度成長期の後半である1966（昭和41）年、豊田市は、佐藤保市長のもとに全国に先駆けて「青少年健全育成都市宣言」を行った。市役所駐車場並びに青少年センター附属体育館横に高さ約5mほどの三角柱の啓発看板が立てられた。その2年後の1968（昭和43）年に文部省から補助金を受け「青年センター」（青年の家）が設立された。そして、1970（昭和45）年東加茂郡松平町が合併して、同年青少年キャンプ場が完成した。この年、豊田市は市制20周年を迎えた。また、「勤労青少年福祉法」が制定され、労働省は全国に「勤労青少年ホーム」を設置し始めた。さらに、1973（昭和48）年、勤労青少年からなる若人の森推進協議会が発足した。ボーイスカウト豊田地区協議会、豊田市子ども会育成連絡協議会、ガールスカウト三河北地区協議会など単位団体を束ねる上部組織としての青少年育成団体が発足したのも、昭和40年代の出来事であった。さらに、高度成長期後半の勢いが残る1975（昭和50）年に入ると、青少年キャンプ場に「少年自然の家」が竣工された。そして、1982（昭和57）年に青年センター地内（八幡町）に「勤労青少年ホーム」が設立された。この時、豊田市独自の出資の下に「青少年会館」も併設され、青年センター・勤労青少年ホーム・青少年会館と合わせて「豊田市青少年センター」と称され、豊田市の青少年健全育成の中央機能をもつ施設となった。こうして勤労青少年の余暇活動の充実を図り、知識と教養の向上を学校以外でも果たすこととなった。豊田市の状況も自動車産業のおかげで人口は年々増大し、1985（昭和60）年には、30万人を超えていた。全国から自動車関連会社に就職するために若い労働者が集まってきていたのだ。「21世紀の城」展望台が完成した時期は、30万人の人々のうち7割が新市民であり、平均年齢は30歳で、全国的に若い人口の都市であった。当時、青少年センターでは、12歳から30歳までを青少年としていたが、その人口は9万7千人であり、豊田市の全人口の3分の1を占めていた。このような状況下、豊田市では「地方から来た若者の定住化」が大きな課題となった。「古里を離れ、工場で働く若者に夢を与えたい。地域社会と交流させ、第二の古里豊田で新しい生きがいを見つけてほしい、との願いが豊田の国際青年年に取り組む基本姿勢となりました。」（※中日新聞5.10）といった当時の記事からもわかるように、豊

田市は文字通り「若者のまち」となり、若者の定住化に向けた取組が本格化した。

こうした中、当時東加茂郡松平町が豊田市に合併する年、松平町の一つの集落（現在の坂上町）の山「炮烙山」に、展望台を建設するプランが出た。標高 684 m の炮烙山は当時の豊田市においてもっとも高い山で、その横の六所山は 606 m で 3 番目に高かった。松平地区は徳川家康生誕の地として有名であり、松平親王のお墓も存在する歴史ある地区だ。冬には天下祭といった伝統行事も行われている。豊田市の北東部にある松平地区の坂上町は、市街地から車で 30 分の距離に位置し、2016（平成 27）年 10 月 1 日現在、142 世帯 429 人で 8 つの集落（日明（ひあかり）・南笹平（みなみささだいら）・真垣内（まながいと）・東宮口（ひがしみやぐち）・仁王（におう）・杉ノ木（すぎのき）・下屋敷（しもやしき）・そだめ）を形成している。（豊田市HPより）この地には仁王川が中心を流れ、六所山、炮烙山、天下峯といった山々があり、自然豊かな土地である。また、松平親氏公の天下平定の祈願寺である「安全寺」や六所神社や農村舞台、不動の滝、B 29 墜落地などの名所・旧跡が見どころの地でもある。さらに、旧足助方面への裏街道として使用されていたが、これらの集落は、少子高齢化が進み、鳥獣被害が多く対策に苦慮していて、災害時の避難が困難な地区でもあった。このようなことから、若者が自然体験活動をするエリアとしては、自然も歴史も市街地からの距離も適していたのだ。

### Ⅲ 1985（昭和 60）年の若者の躍動

次に当時の炮烙山で行われた若者の活動を探求してみる。

「本年 1979 年は、国際連合が 1976 年の第 31 回総会において国際児童年とする旨を宣言した年である。」（厚生白書 昭和 54 年版 総論序章第 1 節）その国際児童年制定の 6 年後に国際連合総会で 1985（昭和 60）年を国際青年年として位置づけられた。豊田市ではこれより以前、1973（昭和 48）年 10 月に、すでに「若人の森推進協議会」は、青年会議所を中心に 1973（昭和 48）年 10 月に発足されていた。そして、六所山に少年自然の家が竣工された 1975（昭和 50）年に、木製の電柱を切って作った「初代 21 世紀の城」が炮烙山に完成した。この 2 年後、若人の森推進協議会は「日本青少年善行章」（（社）日本善行会（内閣府所管））を受賞し、その健全な活動が評価された。その後、「チャレンジ・ザ・炮烙 市民歩け歩け大会」の第 1 回目が始まり、継続して開催された。炮烙山八合目のいこいの広場には、若人の森推進協議会の若者が作ったトーマポールが立てられ、遊具「ロープウェイ」「丸太橋」など手作りで設置された。自然の中で仲間と遊び親しんだのだ。また、電気もなく湧水だけの地で炊事場を設置し、キャンプをして若き日を過ごす場を整えた。その後も炮烙山における活動を続け、この若人の森推進協議会を母体に、1984（昭和 59）年 8 月に I Y Y（International Youth Year）豊田市実行委員会が設立された。この会では、石を集めて 21 世紀の城を建設することが決定された。当時この会の事業としては、「21 世紀の城建設部会」と青年を海外へ派遣する「青年の翼部会」があった。建設部会では、この城の展望台の建設のためにどう市民参加を促し、若者の意志を築き、後世にも伝承させていくかが話し合われた。以降、この城が建設されるまでの 3 月から 8 月までの間、石運びを兼ねた「市民歩け歩け大会」が 4 回実施された。集める石は、市民と同じ数の 30 万個を目標としたが、目標までは届かず、3 万 2 千個が集まった。しかし、この功績は大きい。11 月 23 日の完成式には、市役所から炮烙山山頂までの 23km を 25 区間に分け、ボーイスカウト、子ども会、市内中学校の生徒など一般公募で選抜された若者が、市内小中学校・高校・大学などで寄せ書きされた石を運んだ。若者が手作りし、汗して成しえた「努力」と「夢」を形作ったのである。城壁を含め

た全長 90 m、高さ 8.1 m、最大幅 8 m の「21 世紀の城」展望台には、3 万 2 千個の願いが書かれた石（意志）が使われている。この中には北は北海道、南は沖縄まで 38 都道府県 482 個の日本全国から集まった石も含まれている。若人の森推進協議会の国際青年年の活動が、全国に広がった結果であると評価したい。また、青年を海外へ派遣する事業「青年の翼」では、世界 6 か国へ 12 コースに分け、青年・指導者総勢 180 人を派遣し、各地から石をこの城に持ち帰っている。この他、この事業の趣旨に賛同した個人や業者の方々にも石と意志をいただき、「多石」となり「大志」となった。多くの「志」がここに終結したのだ。ここに、その「21 世紀の城」展望台を築いた時の若者の思いの胸を綴った詩がある。

#### 【石と意志の詩】

永遠にその姿を 変えることのない 石で城を築こう  
寒風をつき 雪をふみしめ 猛暑の中 汗と泥にまみれて  
人々は石を手に ひたすら頂をめざす  
そこには 希望の光が あるかのように・・・・・・  
石と意志の参加と賛歌が 炮烙の山に こだましつづける  
人々の石と意志の結集 三万余個の 尊い石に包まれて  
今 21 世紀の城が その美しい姿を現した  
豊田市の青年のシンボル 21 世紀の城は  
市内最高峰炮烙山から 静かに二十一世紀を みつめ続ける

（豊田市国際青年の年記念誌 石と意志の詩 P 2・3）

市民の 21 世紀へ向けた夢や希望の寄せ書きが集められ、国際青年年における事業の資料は、豊田市青少年センターへ収められた。また、世界各国から寄せられた石は、現在も豊田市総合野外センターに収蔵されている。

#### Ⅳ 引き継がれた意志

こうした歴史のある炮烙山の自然の意義・役割は何だろうか。六所山・炮烙山を切り開いたボーイスカウトの宇野氏が綴った言葉がある。この地を「青少年を育てる山」にしようとした思いである。

#### 【身近な自然が貴重】

溪谷の清流と木々の美しさに加え、自然に溶け込んだ里山の姿、そこには、青少年を静かにそして温かく包み育ててくれる自然がある。都市化の進む中で、こうした貴重な自然が身近にあることの意義は大きい。いくら雄大な自然や理想郷がそこにあったとしても、はるかに離れた自然では、豊田市の青少年にとっては無縁の存在に近い。その意味からも、生活の場につながる自然の役割は大きい。

#### 【自然との調和】

失われていく素朴な人間性を自然の中に求め、たくましい青少年を育てる場として開発を進めなければならない。そのことは逆に言えば、そうした自然を無秩序な開発から守り、青少年のための空間として、その自然を育てていくということでもあり、自然と人がともに育ち合う環境と

して設定していくことこそ重要な課題である。

#### 【自然破壊はごめん】

自然を求めて、今日も人々は都市から山へ海へと繰り出す。しかし、そこにあるのは汚れた自然と人の波。安っぽいお土産と空虚は疲労、自然を楽しむにも一定の「知識と技術」が必要であり、それがないと自然探勝が自然破壊を招きかねない。

#### 【人間生活の再検討の機会】

恵まれた自然の中の生活を、本当に意義あるものにするには、自然を大切に愛する生活から出発しなければならない。文明社会から大自然の中に飛び込み、自然の姿に変える。その中で自然を知り、人生を知っていく。正しい知識は、頭で考えるより、むしろ心で感じることから生まれる。したがって、自然に対する認識と理解も、自然と共に生活し、自然と親しく交わってこそ得られる。人間が文明を捨てて原始に近づき、自然もまた温和な顔を見せて人間を迎える野外生活は、自然と人間の幸福な接点である。

(1970 (昭和 45) 年 4 月宇野眞之氏)

この地の自然を大切にして、自然と人が調和していくことが、自然と人を理解することだと宇野氏は説いている。今回の実習では、33年前を思い出すかのように石に自分の願いを書いて登頂する企画も学生から生まれた。1回目の宿泊で石を拾ってしっかり洗い、乾かし、当日使用する時に、保管されていた昔の石の展示と共に「21世紀の城」展望台の歴史にふれた説明をしている学生の姿があった。過去において若者が行った野外活動が、今、若者によって再びこの地で行われている。1966 (昭和 41) 年の青少年健全育成都市宣言に始まった若者の活動は、時を経ながら積み重ねられていると感じる。年月が過ぎ人は歳をとっていくが、いつの時代にも自然体験活動の良さや実習の大切さは引き継がれ、若者の歴史が刻まれている。六所山・炮烙山の野山を切り開き、坂上町の集落の人々の尊敬を集め、自然の中から共存のエリアを作り上げた宇野氏の偉業は、豊田市の歴史に残り、今もその思いは引き継がれている。

## V 実習の良さ

次に実習の良さを2つの局面「経験」と「机上の空論」から考察しておきたい。

まず、現場の「経験」だけで学習しようとする場合を考えてみよう。例えば、野外活動施設で働く職員は、何年もの間、その施設でテントや野外炊事の準備をするなど、来所する団体の構成員や人数・活動内容によって、職場で次々と準備作業、受入れ業務や指導業務にあたる。そしてその段取りを次のように構成する。「今日は、小学校のキャンプファイヤーの準備をして、夜、



そのエール (司会進行) をする。午後4時まで薪を組み、灯油やトーチ棒を用意して、所定の位置にセットしておく。その後、児童を広場へ集合させ、キャンプファイヤー場へ案内する。その前に女神と山の神の役目の者たちを所定の位置につれていき、キャンプファイヤーの時を迎える。」これは、私が若かりしころ担当した業務だ。こうやっておけばキャンプファイヤーは大丈夫だと職場の先輩から教わった。ルーチ

ンワークのような方法として仕事を教わったのだ。そして、「これが正当なやりかた」と一般的普遍的な技術のように思った。それを3年経験すると、自分の中で慣れて、常態化（マンネリ化）してしまった。これではいけないと自戒し、新たなことに挑み続けたものの、結果的には、本来の目的を見失ってしまった。ここでの児童の学びは何なのか。キャンプファイヤーは心に残る一時となったのか。社会教育施設に従事する指導系職員は、教育者であって、単なる仕事をこなすだけの実施者であってはならない。きちんとその活動の意義を伝えることができこそ、「一期一会」の児童を大切に育むことができる。「できればよい」「こなせばよい」のではなく、一般的な理論や多角的な考えを取り入れ、行っている活動が、「学び」を含んだものであり、その意義が伝えられているかどうかを問うべきである。現場の「経験」だけでは学習は深まらない。

一方、反対に「机上の空論」の場合について考えてみよう。キャンプファイヤーの実施の仕方をテキストから、あるいは先輩から聞いて学んだとしよう。最初の儀式では、女神が火のついたトーチ棒で山の神の足元を照らし、集まった皆のもとへ先導する。しかし、現場を見て知らないと、先導する時、どこでどういうタイミングで火をつけていけばよいのかわからない。また、その経路は、女神や山の神にとって安全なのかわからない。いざ本番では、トーチ棒の灯油が垂れて火が落ちてくることや、風が吹いて火が消えてしまうことがある。現場での行動や安全確認を入念にし、事前に体験しておけば、心構えや咄嗟の対処ができるが、机上の学習だけでは思いもよらない状況に対処できない。それは、その現場の状況が具体的に伝わってこないからである。このように、事前に現地で確認し学習として行うことは大切である。事前の試行での失敗や悪条件下での最悪の経験は、学習するには尚大変よい。本番での実施の時、日差しや風、温度や湿度などを肌で感じ、起こりうる状況を想像でき、対応できる可能性が大きくなるからだ。

以上のことから、「経験」でも「机上」でもそれぞれの学習には足りない側面があり、それに気づかずこれで良しとする「思い込み」がある。「机上」で学び、現場にいて確かめ「経験」しながら学習することは、この思い込みを極力減らすこととなる。「机上」で考え、現場で考え、「経験」する中で「わかる」という実感が生じる。これが「実習」である。実習では、理論をしっかりと組み立てて、現場で検証していくことが大切である。それは同時に、目の前に起きたことに対する観察や自分と周囲の者の行動の洞察ができ、自分の考えを持つことができる良さがある。こうした「考える」「動く」そして「わかる」簡単なことが、自分にとって「心に根付く学習」となっていく。

## VI 企画から実践までのイメージの構築

学生の授業に入る前に一度、授業全体のイメージを構築する必要があった。

この実習は、学生が自然体験活動の支援プログラムを企画して実施する内容である。よって、「自然体験するのは参加者であり、それを支援するのは学生である。」このことをしっかり学生に認識させる必要があった。誰に対して行うのか、なぜ行うのかをはっきりしておかないと、企画の焦点が定まらず、実施しただけの自己満足の結果で終わってしまう危惧があったからである。そこで、学生の実習内容の概要を次のようにした。

- ①参加者が何を望んでいるのか、期待しているのかを推考する。
- ②参加者が行う活動を事前に体験する。
- ③企画を立案する。
- ④企画を実施（支援の実施）する。

⑤ふりかえり（心の整理）をする。

この①から⑤の事柄を具現化するにあたり、1泊2日の宿泊研修を2回実施することにした。①と②では、参加者を意識した取り組みであることを印象づけ、参加者と同じウォーキング体験を事前に行うことで学生の動機を高める。③では、アイデア出しを簡単に行う。この際最初から細かいことを考え、目的が手段と変わってしまうことがないように注意し行う。例えば「何をするの?」「誰がするの?」「どういったいいことがあるの?」など共通したアイデアの根幹を班で作作り共有・共感する。それから、実施に向けての細部の調整を含めた企画を練っていく。班内で目的、内容、タイムスケジュール、役割分担、費用や物品調達など、「ヒト・モノ・カネ・トキ・コト」に関連した事柄を整理することを行う。そして、④で学生が作成した企画を主体的に実施し、学生に任せる。教員は、学生の支援活動の安全性と健康状態の維持、そして全体の進行管理に留意し、学生の企画実施を観察する。その後は学生が支援のふりかえり⑤を行い、今回の実習のまとめを行う。こうした一連のイメージを構築した後、コマ（時間帯）ごとに目標・内容・手法を組み立てていく。シラバスと学生に向けたガイダンスの内容において、その運動性が確認できると考えた。

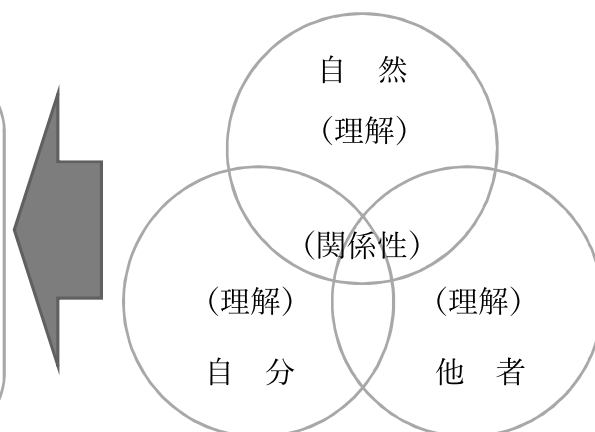
## Ⅶ 自然・自分・他者への理解と関係性から見えてくる自然体験活動

ここで、「21世紀の城」展望台建設のために行われた石運びに関係した活動を含め、自然体験活動が、なぜ若者に多大な効果を与えるのかを明確にしておきたい。

多くの人は実際に自然の中で活動してみて実感しわかっているが、その関係性と効果がはっきりしない場合が多い。自然体験活動といっても、内容によって「野外活動」「自然環境活動」「文化・芸術活動」「第一次産業」と4つに分類することができる。「野外活動」は、キャンプ・野外炊事・カヌーなど野外での生活・運動に関わる活動である。「自然環境活動」は、自然を見守り整備していく自然環境保全の観点を重視した活動であり、「文化・芸術活動」は、自然の中で主に行われる学習、クラフト、天体観測、スケッチなど生活文化に根付いた活動や屋外で行われる伝承文化活動である。また、農業・林業・水産業などの生産の現場の活動である「第一次産業」も自然体験活動に含まれている。この4つの分野に分類できるが、その活動内容によっては複合的要素を持ち、関連性をもつことが多々ある。ここでは一般的に行われるレクリエーション活動でもある「野外活動」を主に取り上げ、その効果を明確にする。

### 【野外活動／自然体験活動】

- ①自然の恩恵の実感
- ②身体健康増進と人間性の回復
- ③他者への共感や思いやり
- ④自然環境への理解の深まり
- ⑤命の尊さの実感





これら5点を、活動体験者である「自分」、おかれた環境である「自然」、そして同行する「他者」を、それぞれの「理解」と「関係性」の視点からみしてみる。

### ①自然の恩恵の実感

スマホが生活における一つのインフラ的役割を担う現代社会において、素朴な人間性を求めていくには、自然体験活動が一番である。若者にとっては、楽しい遊び場であり冒険の場でもあり、たくましく、のびのびと心豊かに育つ場である。その中で、自然を大切にし、愛する活動から出発するのである。ここ愛知高原国定公園の六所山・炮烙山にまたがる自然は、春夏秋冬の一年の季節を通じて、私たちに様々な風景「自然の顔」を見せてくれる。2005（平成17）年4月1日、西加茂郡藤岡町、小原村、東加茂郡足助町、下山村、旭町、稲武町と合併する以前においては、低山でありながらも豊田市の一番高い山であった炮烙山。そこから見える眺望は、すがすがしく心晴れやかにしてくれる。遠く南の眼下に豊田市の市街地が見え、西の方角に猿投神社を祀った猿投山の雄々しい姿を見ることができる。炮烙山林道2号線から八合目のいこいの広場にまたがり、登山道には、頂上からの湧き水でできた小川があり、途中の砂防ダムを越えると、時折、流れる水の音に耳を奪われたり、名前も知らない小鳥の声に聞き入ったりすることがある。ヒノキ、スギ、コナラ、クリや楠木などの木々や根本に生えるウラジロ、ドクダミなどの野草の織り成す景色の中で、獣道の登山道（一人が通れる幅の道）を歩いていると、南から差し込む木漏れ日に新鮮さを感じる。また、その林間をすり抜ける風の中でひとたび足を止めて深呼吸すれば、茶褐色の土とヒノキの匂いで私たちの気持ちは癒されることが多い。野草や木のおい、滝の水の音、小鳥のさえずり、木の葉を揺らす風、青空に浮かぶ雲、眩しく暖かい太陽など、市街地に暮らす人々にとっては、非日常的な環境だ。ここでは、スマホは通信圏外で通じない。人間は文明社会を築き、独自の文化を地域社会でつくり上げてきたが、もともとは自然の中で暮らす生き物である。それゆえ、自然に接する機会は懐かしさを呼び起こし、安堵感を得て、目で見、耳で聞き、鼻でおいをかぎ、指先や肌で自然を感じ、元気を取り戻し、英気を養うことができる。しかし、自然は時に私たちに厳しいこともある。今年（2018年）中部地方を直撃した21号・24号の台風の時は、雨風が吹き荒れ木々をなぎ倒して炮烙山の林道をふさぎ、登山道を折れた枝や落ち葉で隠した。また、例年冬には気温が零下となり、みぞれや雪が降り、八合目のいこいの広場の池の水は凍りつき、手を洗うことができないこともある。豪雨の時には土砂が林道の側溝をふさいでしまう。このように、我々の生活・生命を脅かす現象を引き起こすこともあるのだ。その自然の脅威にさらされた時、「私は生きている」「自分の力で生きぬく」「生きたい」という意志を持ち、工夫と知恵が生まれてくる。こうして育つ若者は、自然の中でたくましく育っていく。しかし、それは同時に自然の中で生かされているにすぎない。いつ、地震がおきて、山が崩れ、寝ている時に押しつぶされてしまうかもしれない。霧に巻かれ、足を踏み外して谷へ転落するかもしれない。私たちは自然に生かされている。だからこそ、木々の実、野草やきのこなど自然の中で共生するものたちを食することができ、自然への恩恵を得ることができるのだ。このように自然へ目を向け、向き合いたくましく生きようとした時、自分と自然との関係を実感でき、野外活動の醍醐味を味わうことができる。

### ②身体健康増進と人間性の回復

次に、自然の中で活動する自分自身へ目を向けた時、そこでは、ストレス解消を含めた自分の



健康の増進を図ることができる。不便さが日常の自然界、人間がつくり上げた便利な社会はここにはない。電車、バス、自動車といった移動手段は、自らの二本の足に変わる。冷房も暖房もエアコンもなく、日の光の温かさや日陰、吹く風の涼しさに変わる。食べるものを調達し、自分の手で調理するなど、自らの手で関わるが多くなっていく自然の中での生活は、山道を歩くことで自分の足腰が強くなり、身体の代謝が徐々に高まっていく。生産活動の分業化が進んだ便利な社会から一変して、自分の力が試され、エネルギーが費やされることで健康の増進がもたらされるのだ。

また、便利さに慣れた日常的な生活は、どこか我々に大なり小なりストレスを与えている。それは、職場での仕事や日ごろからの人のつきあい、家庭における育児の疲れ、簡略的な日常会話からくるひずみ、人それぞれだが必ず多少なりともある。それは、取り巻く環境に対して、自分がこうあってほしいという願いをもつからである。自分の思い通りになってほしいと思うことは、人間の当然なる欲求であり、決して悪いことではない。それゆえに今までとは変わった自然環境に身をおくことで、非日常的な空間を作り出し、そこで自分の生きてきた道・時・人との関わりを振り返り、自分がどうしたいかを見つめる時間を作り出していくことができる。時間に追われず、時を満喫する中で生まれる余裕が自己回想を深め、自尊心を抱かせ、自己肯定と次なる希望を抱かせる機会となる。こうして自分への理解を深めていくことができるのが、自然という環境の場である。

### ③他者への共感や思いやり

自然体験活動における同行する他者と自分を見つめる。人は一人では生きていけない。生産分業制の社会においては、皆それを知っている。しかし、当たり前のことであるがゆえに、その生産物の豊かさとその恵（めぐみ）を忘れがちだ。しかし、自然の中で他者と共に生活することで、その生産物のありがたさと人との協力やつながりを大切に感じることができる。「同じ釜の飯を食う」といわれるが、共に食し、共に生活する中で、飯のうまさや他者と一緒に居る幸せを感じ、協働の意味を得る。同じテントや施設での宿泊、炊事や他の活動を協力して成し得る。いわゆる協調性が生まれてくるのだ。野外での生活の中で他者を思いやる心が育ち、自然の中での生活において、自立した行動や創造性のある活動の中で自分の役割やスタンスが見えてくる。これから登る炮烙山の姿を、遠く六所山麓の登山道から眺め、そして自然のもたらす野草、木の実と一緒に作った豚汁などを食する時、同じ感触、心の動きである共感が生まれる。あの時のあの山は、あの時の味は、といった思いが、自然の中で一緒に営み過ごすことで、他者との共感や絆を深めていく。協働の生活の役割・大切さを知り、協力することで成しえた達成感は決して忘れることはなく、心に刻まれて残っていく。自然体験活動では、このように他者への理解と関係性を深め、「絆」となっていく。テレビゲームの世界とは違い、自然の中で直接対面する世界、目に見える協働の世界なのである。

### ④自然環境への理解の深まり

六所山の夜は、市街地よりも暗い。少年自然の家は六所山の中腹にあり、周りの山々の間から空を見上げると、星がはっきりみえる。市街地ではきらびやかな光が多くて、空が白っぽくなり、星が見えないが、木々のある自然から見る空はいい。星空を見ていると、小さな自分を感じることがある。星空観察では、今我々がいる星は地球であるという説明をよく聞くが、今立っている

大地が地球という星の地だと感じることはない。しかし、ひとつの世界にいることは実感できる。地球温暖化が進みつつある現代、オゾン層の破壊、黄砂または花粉などの空気の汚染、農薬による川の水質汚染、酸性雨による木々への成長被害、自然界の食する関係の均衡が崩れてきている。イノシシが田畑を掘り起こし、農家は農作物の被害を受け、シカが木の芽を食べ荒らしている。豊田市の山間部に行けば、イノシシ除けの鉄柵や電線など所々で見受けられる。市街地ではあまり見られない光景である。農産物を守る手段として、農家はとらざるを得ない方策であるが、自然体験活動をしていると、こうした自然環境保全の大切さを感じることができる。市内全域にあるコンビニで渡されるビニール袋は、自然の中では何年たっても土に還らない。それをカラスやニホンカモシカが食べれば、胃の中で残ってしまい、消化されない。落ち葉は腐葉土となり、地中の虫や木々たちの栄養素となっていくが、人工物は自然へ還元されないのだ。自然という巨大なものの中に人間は小さな生き物にすぎないが、その小さな生き物でも、この環境を生きていくために大切にすべきことがある。

2002（平成14）年にサンフランシスコのヘッドランド・インスティテュートへ訪れた時のことである。ここは、少年自然の家や青年の家と同じ教育施設であるが、その取り組みは、環境と人とのつながりを来館の子どもたちに、具体的に説明することを主としている。ここでは、自然や大地との関わり合いを真剣にとらえることで、なぜこうする必要があるのか、子どもにも分かりやすく説明している。教育目標は3点あり、「子どもに土地感をもってもらう」「自然界の動植物や気候など個々の関係を学ぶ」そして、自然から受け取った資産をどう管理し運用するかといった「スチュワードシップを育む」という点を明示している。自然保護の説明看板を見るだけでなく、インストラクターがわかりやすく説明し、子どもたちとコミュニケーションをとりながら、人と人とのつながりや弱肉強食の生物の連鎖を伝えることで、人や物の大切さを学ぶのである。自然環境保全とは、自然界の連鎖を地球規模で考え、地球というみんなの乗り物を大切にしていこうということではないだろうか。こうして自然活動では、その大いなる自然への理解を深めていくことができる。理解とは頭で考えることでなく、行動することである。自然の中で自分ができることを少しでも気づき、行動することが大切である。

#### ⑤命の尊さの実感

今から35年前、豊田市少年自然の家へ霧深い朝に出勤した時であった。自然の家の事務所の窓の下に「モズ」という小鳥が横たわり、当時宿泊していた小学生たち数人が寄って来ていた。私にとっては珍しいことではなかったが、悲しいことであった。夜、玄関の街灯の明かりが暗い事務所の窓を照らし、透明なガラスが鏡になっていたようで、モズがそこにぶつかって首の骨を折ってしまった。生き物は生きていた時は温かい。しかし、死ぬと冷たくなり温かくない。誰もが頭で知っていることだ。モズを手の平に乗せてみると、からだはぐったりとして冷たい。私はスコップで地面に穴を掘り埋めて、土に還した。小学生たちはその様子をじっと眺め、最後はみんな手を合わせていた。しかしあつという間に、彼らも小鳥のように去っていった。私の周りには、自由に飛び回っている小鳥たちが多くいるように思えた。しかし、ここには土に埋まった小鳥がいて、その小鳥は鳴かない。生きていた時の温かささえも聞けなさを感じた。目の前にある死から生への執着と大切さを思い起こさせるのである。普段、聞きなれた鳥の声も、土に埋まってしまえば聞けない。生への躍動を感じ、子どもたちと共感しあう学びがこの自然の中にある。朝礼の後、事務所の窓を開けたとたん、一筋の光が室内を走って裏の窓へ抜

けた。一瞬のことだったが、急いで窓を閉めた。雷に打たれず助かったこと、自分の命ある喜びを感じた日だった。

## VIII 自然体験活動の実習がもたらしたもの

次に、私が実習として学生を迎えた時の自然体験活動で得た効果・効用を見てみる。

この表は、実際に学生が実施した支援プログラムである。2回の宿泊を通して、実施することとなった班別活動であり、炮烙山の八合目のいこいの広場でテントブースを設けて行われた。1班5名から6名で構成され、AからEの5班から成る。

| 班 | タイトル                            | 内 容  |
|---|---------------------------------|--|
| A | ほうろクラフト<br>(学生5人)               | 拾った落ち葉・木の実などでコースター状の木の台にオブジェクトを作る。東駐車場で、拾う時に使う袋を配る。対象50人   |
| B | ビンゴ&神経衰弱<br>(学生5人)              | ①マス目5×5の用紙に数字を書いてもらいビンゴを行う。1列のビンゴで松ぼっくりを使った賞品を渡す。先着6名<br>②どんぐりを使った神経衰弱。20個のどんぐりの中から2ペアのどんぐりを当てる。タイム制。対象50人 |
| C | 小石に願ごとを書いて頂上においてくる。<br>(学生5人)   | 石を渡して、願い事を書いてもらい、21世紀の城に置いてくる。置く場所は、その場で学生が指定する。対象200人   |
| D | 炮烙山クロスワードパズル<br>(学生5人)          | 炮烙山と21世紀の城に関するパズルを解いてもらう。グループまたは個人で1枚。全問正解で21世紀の城オリジナルスタンプ、参加賞で炮烙山スタンプを押す。対象200人                           |
| E | モザイクアートをつくらう！ in ほうろく<br>(学生6人) | 模造紙にほうろくのデザインを書いておき、落ち葉を集め指定の場所に張る。対象200人  |

A班は、「炮烙山」「クラフト」を文字ってタイトルを「ほうろクラフト」とし、グルーガンと自然の材料を使っての工作である。青少年センターの公用車はハイブリッドカーであり、災害時でも使用できるように100V電源の供給口がある。そこから電気をとり、グルーガンで接着するために使用した。B班のどんぐりを使った神経衰弱には独創性があった。トランプをイメージすると平面の紙になるが、立体的な自然の木の実を使った遊びを紹介していた。C班は、過去の歴史の回顧であり、「願いを石に書き、頂上に歩いて持っていこう。そして、昔の歴史を知ろう。」としたアイデアであり、昔使用されたものと同じ絵柄の焼き印「チャレンジ・ザ・炮烙」を押したコースターを配布した。D班は炮烙山にちなんだ問題をクロスワード形式で解くことにより、この山を知ってもらうとしている。ヒントは八合目のいこいの広場にあり、誰でも解くことができる簡単なもので、正解した参加者の回答用紙に、学生自身がデザインした炮烙山スタンプ(材料:消しゴム)を押していた。E班は、木の葉をウォーキング時に集めてきてもらい、A1サイズほどの大きさの段ボールにかかれたひまわりの絵に貼って、記念のモニュメントにしようとしたものだ。どの班もこどもからお年寄りまで気軽に自然の中で楽しめる内容であり、インスタ映えを意識している。こうした活動がもたらした効果は、どのようなものなのか。

文部科学省のHPでは、自然体験活動は「社会を生き抜く力」を養う効果があるとしている。

それは、コミュニケーション能力、自立心、主体性、協調性、チャレンジ精神、責任感、創造力、異なる他者と協働する能力であり、体験活動は、自分自身との対話と実社会とのかかわり等を考える機会になるとしている。すなわち、この機会を得ることで、未知なるもの、自然に向き合った時、あるいは、思い通りにならない状態に対面した時に「対応する力がつく」としている。問題解決能力をつけ、危険を未然に察知し防止する力をつけることが青年の課題であり、今一度、日常生活を見直す機会が大切としている。このことを踏まえながら、この実習がもたらしたものをみってみる。学生が他者から受けた気づきや恩恵といった受動的な心の動きである「学び」と、学生が主体的に行動した能動的な心の動きである「学ぶ」の面を、学生のレポートから整理して、①自然体験活動と達成感 ②他者への理解と協働による絆感 ③支援活動による社会学習 の三つの項目にまとめた。



#### ①自然体験活動と達成感

学生26人を5班に分け、5つの企画を立案し実施した。まず全体で現地の資料をスライドで見て学び、ここで何ができるかアイデアを簡単に話し合った。次にイベント参加者と同じ条件で、ウォーキングで現場に訪れ、アイデアの実現性を確認した。自然体験活動を「支援の事前学習（自己学習）」として行ったのである。そして、イベント当日を迎え、企画を実施し「支援学習」を行った。1回の経験では、自然への理解・恩恵そして活動を支援することは十分できないかもしれない。しかし、過去の若者の歴史や今回のイベントをプロジェクターで学習しても、頭に残っても心には残らない。すなわち実感できない。人間は実感できないことは自分の中に経験として根付かない。ある学生はこのようにレポートに記している。「何をするにも、自分の力で一からやらなければいけないことは、普段の生活ではあまりない。」「見て聞いて触れることを体験することで、本やテレビ、ネットではわからないことを知ることができる。」「自分の足で登って体験したということが大切だ。」ここでは、直接対面して、自分の耳で聞き、目で見て知ることができ、体験活動の大切さ・意義を実感していることがわかる。また別の事例では、企画立案当初「自然の中の活動なのだから、既存のもの（商品）を提供するのはどうか?」という疑問を投げかけたところ、学生は、どんぐりと松ぼっくりで簡単な置物（クラフト）をつくって、参加者へビンゴの賞品として渡した。その結果、「『こんなに素敵なものをいただいているの?』と喜んでいただいた時は、とてもやりがいのある、達成感や喜びを感じた。」と記している。また「参加者から『ありがとう』『楽しい、楽しそう〜』といわれた時やりがいを感じた。」としている。

「聞いたこと」は忘れてしまうことがある。しかし、実際に自分で「見たこと」はより知ることにつながる。そして「聞いて見て実施すること」は、自分の心に残り、理解することにな



る。学生は、自然体験活動を支援する学習から、活動の良さとやりがいからくる達成感を感じていた。

## ②他者への理解と協働による絆感

次に自分と他者への理解と関係性の観点から、学生のレポートを見てみる。5～6人からなる班の中で考え、一つのアイデアに固めて企画を練り上げ、役割分担のもとで実行した。その終了後に「あなたがスタッフや参加者に配慮した点は何ですか？」という問いかけをしたところ、スタッフに対しての配慮では、次のような意見・感想があった。

「みんなと同じベクトル（方向）に向かうようにすることも大切にした。」「私が特に気をつけていたことは、相手の意見を否定せずに受け止めてから、自分の意見を主張しすぎないように伝える。『◎◎の意見もいいね。でも〇〇はこういう可能性があるから、△△のほうがいいんじゃない』と配慮した。」これらから、学生同士の話し合いの中で、他者の心の動きを意識してコミュニケーションを図ろうとしているのがわかる。また「学年も学科も別々であり、かつ初めて会った人でも2日間生活を共にすることで、新たな人のつながりを形成できると感じた。」としている。企画を練る上での留意事項、実施する上での参加者・企画準備のチェックポイントもそれぞれ班で行い、協働作業で実施した。準備した企画を他者へ提供する中で、仲間への心遣いが「学生同士の絆感」につながることを学んでいる。

また、炮烙山における若者の歴史を学び、市民の参加者へ話した学生は、こう書いている。「新たに知識を身につけるととても嬉しいし、誰かに教えたくなる。つまり知識をどんどん人に広げることができる。」これは、自分にとって新しい知識を発見する楽しさ、そしてその知識を人に話す意欲、知識が広がっていくことを実感している。自分が学ぶだけでなく、伝えようとしているのがわかる。この学生は、教え伝える手法を学習していくことになるだろう。

次に、参加者への配慮の点では、こんな記述もあった。企画したビンゴのクイズの答えに対して、学生が参加者から聞かれた時のことだ。「配慮した点は、近くのマップのあるところに一緒にいって、自分で答えを探し出してもらったことです。こちらがヒントを出してわかった答えを、そのまま書いて正解を出してもらいよりも、自分の目でみて、頭で考えて答えを出してもらった方が、正解できた時の喜びや達成感は大いし、新しい発見につながって勉強になると思ったから」とあった。ここでは、「教える」のではなく、参加者に「気づかせる」教育手法であるカウンセリングを行っているのが伺える。「気づかせる」ことは、主体性を育てること、創造力をつけること、そして行動することにつながる大事な教育上の手法である。

また、参加者への安全性を気遣った行動もあった。参加者のウォーキングする足場が前日の雨でぬかるみ、八合目のいこいの広場へ上がる階段が滑りやすくなっていた。学生は、それに気づき、参加者が登る前に、軍手で階段の泥や草を取り除いていた。軍手は泥だらけとなったが、滑ってけがをした者はいなかった。リスクを事前に回避することになり、前日の雨が幸いに転じた。このことは、次に自然体験活動を実施する時に、雨だったらどういった対策をしたらいいかを考えることにつながる。こうした経験の積み上げが、意識を上昇志向に導き、活動の安全性を高めていく。そして、創造領域の幅・分野が広がり、協働する行動が深まる。明確に現場を知り、起こりうる事象を考える。そして、実行して経験値を上げる。それが、自分の知識や技術となり、「社会を知る」ことにもなる。現場を見る、現場でやってみる、そして考えを整理する。それが自分の納得できる知的財産である。成功とできなかった原因を知り、そして次を目指し、新た

なる発見を知る。その経験の中で、参加者から「ありがとう」「楽しい、楽しそう～」といわれた時やりがいを感じ、他者との関係性は深まっていく。

このように、学生同士、学生と参加者といった関係がここにあり、自らの企画が他者へ実施される中で、他者への心遣いや絆感が学生自身の中に生まれていることがわかる。

### ③支援活動による社会学習

次に、学生はこの支援が社会学習・社会貢献としてとらえていたかをみしてみる。自然体験活動は、自然と自分がつながる、自分と他者がつながる活動であり、つながった中で、自然を理解し参加者を理解し、受け入れることになる。同時に畏敬の念、感謝の念をもち、生かされることを実感する。その自然体験活動を支援する中で、自らが社会を理解する学習やその社会に貢献できただろうか。



今回の実習を終えて、ある学生が言った。「親子、祖父母孫とのよりよい関係づくりの手助けが少しはできたのではないか。」「自然と触れ合うという非日常を通して家族間や夫婦間、知らない人の間でもコミュニケーションが生まれていた。」このように、貢献という言葉はレポートにはなかったものの、この活動に関与して、参加者のよりよい関係づくりへの手助けとなれたことを実感していることがわかる。また、「今回のイベントに参加したお年寄りから『あの頃は・・・』という話を聞いた。」としていることから、学生はこの炮烙山の歴史と人びとの当時の思いをスライドだけでなく、参加者と直接対面してコミュニケーションをとり、自分の耳で聞き、目で見て、その地域社会の歴史を知ったことがわかる。

## IX 豊田市の青少年教育の真髄に迫る：「生き抜く力」と「育む力」

1985（昭和60）年の国際青年年に死去されたエドガー・デール（Edgar Dale）氏は、「Cone of experience」の中で「The Learning Pyramid」を用いて、経験する・行動する重要さと知識を広める・教えることの大切さを説いている。また、中国の古典において荀子は「聞かざるは之れを聞くに若かず。之れを聞くは之れを見るに若かず、之れを見るは之れを知るに若かず、之れを知るは之れを行うに若かず。」「学は之れを行なうに至って止まる。」（中国古典名言辞典諸橋轍次「講談社学術文庫」p389より）としている。聞くよりも見た方がいい。見るよりも知る方がよく、知ることより実行することがよし、結局、教養や学習は実行することにあるとしている。このように、先人の賢者たちは体験学習の大切さを説いている。今回、「炮烙山」にて自然体験活動の支援を行ったが、過去に行われた豊田市の青少年健全育成事業「21世紀の城」展望台建設の若者の活動と今回の実習の中で、その体験からくる学習が「生き抜く力」と「育む力」を生み出していることをみしてみる。

豊田市の行政主導のもと、1970（昭和45）年六所山キャンプ場、1975（昭和50）年少年自然の家が整備された。一方で、その北東に隣接する炮烙山では、「若人の森推進協議会」という勤労青少年の力が中心となって整備された。そして、それはすべて「ボランティア」であった。岡

崎市の電力会社から寄付された木材の古い電柱を炮烙山へ運び、十字に配置して「初代 21 世紀の城」展望台を作った。また、自らの発案でキャンプサイトや「たくましさの道」「そうぞうの道」「おもいやりの道」という登山ルートづくり、八合目のいこいの広場には、考案した遊具を手作りで設置した。これは、自分たちのやりたいことをしただけでなく、炮烙山を若者のキャンプ場、野外活動の場所として市民に活用してもらうことで、その土地である「坂上町日明（ひあかり）」を市民に広く知ってもらうことをねらい、地元へ貢献しようとしたのだ。この取組は、1985（昭和 60）年国際青年年に実施された「21 世紀の城」展望台建設事業の母体となった。その中で「市民歩け歩け大会」の事業を 4 回実施して、市民が石を炮烙山へと運んだ。若者は自分で「考え」、自ら「動く」ことで自己の成長を促し、やがて地域社会に役立つことで大いなる達成感と幸福感を得た。

先人の取組は、今回の実習の学生のレポートの中でも伺えた。自ら企画を考え、主体的に動き、参加者の支援となることで喜びや「やってよかった」という感情をいただいていたからである。ウォーキングされた参加者の中には、地元住民の方々も多く見えた。そこには、学生がコミュニケーションをとる中で、地域社会への理解の深みがあり、市民の参加者の感謝があり、そこに集った人とのよりよい関係性があった。「考え」「動き」「わかる」行為が、「生き抜く力」を生み出し、若者自身の人生と地域の若者の歴史を築いている。

また、若人の森推進協議会もこの実習に参加した愛知教育大学の学生の場合も、共通した大切なことは、「あと押し」である。建設するには、行政や社会教育施設職員の協力である資金援助・物品援助・人的援助・理解活動などの「あと押し」があった。地元の地権者が、木々を切ることやその土地を通ることを了解しなければできなかった。若者が切り開いていく姿を認め、道具を地元業者から借りなければできなかった。実習では、テントや机・椅子を配置し、弁当を配達する。宿泊場所の提供やバスの手配、準備のために作成した物品の保管、材料の運搬などがあった。それは、周りの大人の協力である。若者の「考え」「動き」「わかる」主体的な行動経験が、若者が「育つ」ことにつながるが、そこには、若者が活動しやすい環境（ヒト・モノ・カネ・マスコミ・コネクションなど）が必要であり、それを大人が協力・援助することが「あと押し」である。即ち、単に与えるだけでなく、若者の考えを受け入れ、その実現に向けて努力することである。時には修正・方向転換を迫られることもあり、軋轢（あつれき）を生むこともあるが、屈せず忍耐力をもって、持続的に若者につきあうことだ。これが「育む力」につながっていく。

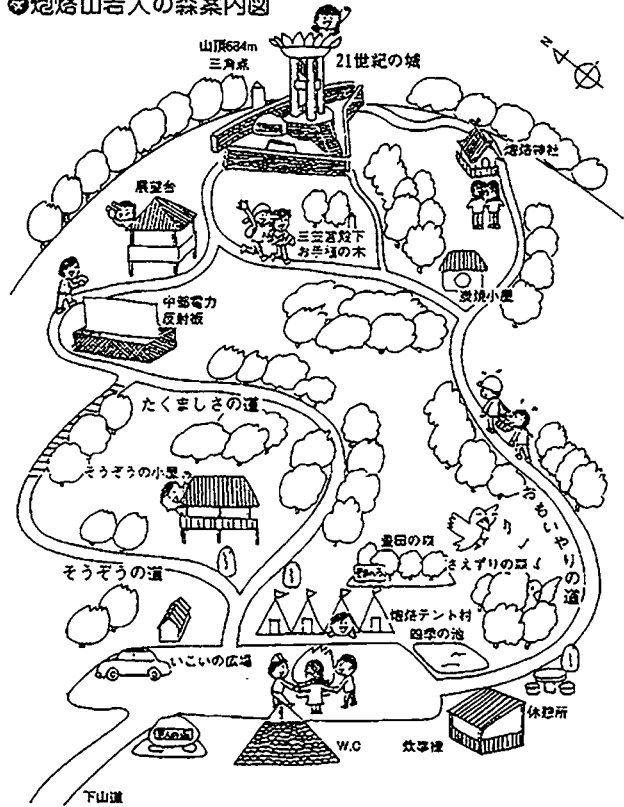


## X おわりに

今も昔も自然体験活動は、地域社会で生き抜く力を育むことにつながり、地域の担い手をつくっていく。自ら考え行動した豊田市の若者の歴史や今回の実習がそれを表している。若者が、住民の理解と協力の関係の下で自然体験活動を仲間とともに実施していき、その実行力を発揮していく。そして、それが社会に役立つことで、自らの存在価値を知り、達成感につながる。こうして、仲間とともに生き抜く力を継承し、今につながる地域社会の歴史を作ってきた。自らの力を社会に生かすことを幸せと思うと、自己の人間性を高める機会でもあり、「学び」と「価値」と「幸福」がそこにある。

「21世紀の城」展望台からみる眺望は素晴らしい。南には豊田市街地、西には旧豊田市で2番目に高い標高629mの猿投山、そして、眼下に3番目に高い606mの六所山が見える。この展望台とその城壁は、皆で持ち寄った石3万2千個でできている。どんな夢を描いて石を運び、その意志を託されたかは、風化された石からは読めないが、展望台からみる眺めから、「生き抜く力」「育む力」を確かに感じるができる。

◎ 炮烙山若人の森案内図



### <参考文献>

- ・豊田市国際青年の年記念誌 石と意志の詩
- ・「20年の歩み」財団法人豊田市文教施設協会 豊田市総合野外センター
- ・中国古典名言辞典諸橋轍次「講談社学術文庫」p 389より

シラバス

|                       |   |         |                         |     |      |             |            |      |      |  |
|-----------------------|---|---------|-------------------------|-----|------|-------------|------------|------|------|--|
| 開講年度                  | 2018  | 授業コード   | 1172515                 | 学年※ | 1    | 開講学期        | 後期         | 曜日時限 | 集中講義 |  |
| ※学年は、開講学年と異なる場合があります。 |   |         |                         |     |      |             |            |      |      |  |
| 授業科目                  | 172512 自由 社会教育実習 I  |         |                         |     |      | 各専攻・コース等指定室 |            | 単位数  | 1    |  |
| 担当教員                  | 非)水野 貴宏   |         |                         |     | 教室   | 各専攻・コース等指定室 |            |      |      |  |
| 免許科目                  |   |         |                         |     | 免許対象 |             |            |      |      |  |
| 授業目標                  | <p>《観点》 1.知識/理解 2.思考/判断 3.関心/意欲 4.技能/表現 5.その他</p> <p>自然体験活動における「自然」と「人」との交流・学習プログラムを企画し実施する中で、自然の恩恵と野外活動における支援の仕方を学び、自然体験活動の指導者としての知識・技術の向上を図ります。</p> <p>[テーマ]<br/>自然体験活動の支援を学ぶ</p> <p>[目標点]<br/>1 自然とのふれあい、人とのふれあう意義・大切さを伝えることができる。<br/>2 参加者の安全・安心を配慮・確保することができる。<br/>3 自然体験活動における指導者の視点をもつことができる。</p>  |         |                         |     |      |             |            |      |      |  |
| 授業計画・方法               | <p>本授業は、1985年国際青年年の豊田市における青少年育成事業の取り組みを振り返るイベント「市民いきいきウォーキング」に参画する中で、自然体験活動の大切さを学び、子どもからお年寄りまでの活動支援・交流活動を実施します。</p> <p>1泊2日の宿泊を2回計画します。宿泊①(10月20-21日)は自己学習(現地企画)、宿泊②(11月9-10日)は支援活動の実習となります。</p>  |         |                         |     |      |             |            |      |      |  |
| AL                    | EN  | 授業内容・方法 |                         |     |      | (担当教員)      | 授業外学習指示    |      |      |  |
| :                     | :   | 第1回:    | 野外活動施設の概要(ガイダンスを含む) 宿泊① |     |      | :           | 宿泊施設の掲示物   |      |      |  |
| :                     | :   | 第2回:    | 自然体験活動ウォーキング体験 宿泊①      |     |      | :           | 記念誌 石と意志の詩 |      |      |  |
| :                     | :   | 第3回:    | 自然体験活動ウォーキング体験 宿泊①      |     |      | :           | 記念誌 石と意志の詩 |      |      |  |
| :                     | :   | 第4回:    | 自然体験支援プログラムの企画立案 宿泊①    |     |      | :           | 企画研修資料の通読  |      |      |  |
| :                     | :   | 第5回:    | 自然体験支援プログラムの企画立案 宿泊①    |     |      | :           | 企画立案資料の作成  |      |      |  |
| :                     | :   | 第6回:    | 自然体験支援プログラムの現場確認 宿泊①    |     |      | :           | 企画立案資料の作成  |      |      |  |
| :                     | :   | 第7回:    | 自然体験支援プログラムの現場確認 宿泊①    |     |      | :           | 企画立案資料の作成  |      |      |  |
| :                     | :   | 第8回:    | 企画の整理・発表・シェアリング 宿泊①     |     |      | :           | 企画立案資料の作成  |      |      |  |
| :                     | :   | 第9回:    | 企画の整理・発表・シェアリング 宿泊①     |     |      | :           | 企画立案資料の作成  |      |      |  |
| :                     | :   | 第10回:   | 企画実施の準備確認 宿泊②           |     |      | :           | 実践記録の作成    |      |      |  |
| :                     | :   | 第11回:   | ウォーキング活動のサポート企画の実施 宿泊②  |     |      | :           | 実践記録の作成    |      |      |  |
| :                     | :   | 第12回:   | ウォーキング活動のサポート企画の実施 宿泊②  |     |      | :           | 実践記録の作成    |      |      |  |
| :                     | :   | 第13回:   | ウォーキング活動のサポート企画の実施 宿泊②  |     |      | :           | 実践記録の作成    |      |      |  |
| :                     | :   | 第14回:   | ウォーキング活動のサポート企画の実施 宿泊②  |     |      | :           | 実践記録の作成    |      |      |  |
| :                     | :   | 第15回:   | 実施後のふりかえり・整理 宿泊②        |     |      | :           | レポート       |      |      |  |
| :                     | :   | 第16回:   |                         |     |      | :           |            |      |      |  |
| 教科書:                  | 必要な資料は、印刷して適宜配布します。   |         |                         |     |      |             |            |      |      |  |
| 参考書:                  | 豊田市国際青年の年記念誌「石と意志の詩」(1985年)   |         |                         |     |      |             |            |      |      |  |
| 評価基準・方法               | <p>《定期試験》 1.筆記試験 2.口述試験 3.報告書審査 4.作品及び技術審査</p> <p>実習参加(50点満点) 企画・実施(30点満点) レポート(20点満点)</p>  |         |                         |     |      |             |            |      |      |  |
| 備考                    | <p>メッセージ、オフィスアワー</p> <p>○移動に関する情報<br/>参集・解散は、愛知環状鉄道「新豊田駅」とし、宿泊所までは手配したバスで移動します。</p> <p>○宿泊に関する情報<br/>「豊田市総合野外センター(少年自然の家)」にて宿泊(HPにて確認)<br/>・共同部屋、共同トイレ、部屋割りは当日連絡します。<br/>・食事、シーツ代は実費負担。 宿泊①1,535円 宿泊②985円 事前(10/11ガイダンス)に集金します。<br/>・アレルギーのある方は事前に相談してください。</p> <p>○持ち物・服装に関する情報<br/>・軽登山用/バックパック・水筒(水・お茶)・懐中電灯・笛・ライター・新聞紙・カップ(傘)・10月20日昼食<br/>・宿泊用/タオル・洗面用具・着替え・パジャマ・保険証・持病の薬(石鹸・シャンプーあり、ドライヤーなし)<br/>・服装/動きやすい服装・運動靴(ハイキングシューズ)・帽子・軍手 (市街地より3°C低い気温)</p> <p>○その他<br/>本事業は、豊田市の青少年育成団体および豊田市青少年センターの学生グループが多数参画しています。参加市民のみならず、他の団体との関わりを大切にして交流の会話を深めるよう心がけてください。</p> |         |                         |     |      |             |            |      |      |  |